

資料と公共性 : 2018年度研究成果年次報告書

岡崎, 敦

九州大学大学院人文科学研究院 | 九州大学大学院統合新領域学府 : 教授

市澤, 哲

神戸大学大学院人文科学研究科 : 教授

石田, 栄美

九州大学附属図書館 | 九州大学大学院統合新領域学府 : 准教授

後小路, 雅弘

九州大学大学院人文科学研究院 : 教授

他

<https://doi.org/10.15017/2230688>

出版情報 : 2019-03-14. 九州大学大学院人文科学研究院

バージョン :

権利関係 :

公共のなかの人文学／公共性をつくり出す人文学

市澤 哲

はじめに

本報告の目的は、第一に、「資料と公共性」というテーマに対して、報告者のこれまでの活動経験からコメントすることにある。第二に、その活動経験をより普遍的な問題として考える際に、参考になると思われる知見を検討する。そして、これらを通じて、「資料と公共性」というテーマで研究、実践を進めていく糸口について考えたい。

1. 「地域歴史遺産」という考え方

報告者は2004年の設立以来、神戸大学人文学研究科地域連携センターで活動してきた。本センターのミッションは、市民、自治体、大学などの連携活動によって、地域の歴史遺産を保全し、活用する実践を積み重ね、その方法論について研究することにある。

センターの活動の基礎になっているのは、「地域歴史遺産」「連携活動」という二つの考え方である¹⁾。まず、「地域歴史遺産」とは、歴史遺産を例えば指定文化財のように、既存の枠組みに基づいた所与のものとするのではなく、諸主体が身近な地域のある物件を「歴史的に大切なモノ」と認識することによってそれが歴史遺産となる、という考え方である。言うならば、地域の中で「遂行的に」つくられる歴史遺産が、地域歴史遺産なのである。

次に、「連携活動」である。連携活動の肝要は、様々な立場のアクターが参加することにある。アクターが相互にそれぞれの立場や強みを認識し、自分のできることと、他のアクターの助けを借りるべきことを弁別し、自立と依存を織り交ぜて活動することで、地域歴史遺産の保全活用をよりよく進めるだけでなく、地域社会のネットワークとりわけ大学の地域社会への参画一が豊かなものになる可能性がある。

次に報告者が関わった事例を紹介しよう。これまでも様々な機会に触れてきた²⁾が、兵庫県尼崎市の富松地域における富松城跡保存活動は、「地域歴史遺産」の事例として示唆に富んでいる。本活動は地域住民による「まちづくり委員会」を中心に、地域にある富松城跡の保存を求めるものであった。同地はもともと私有地で、いったん相続税として物納されたが、尼崎市によって市有地と交換され、市の文化財として保存されることになった。このような結果に至ったのは、遺跡の歴史的価値に加え、住民の活動が地域社会にとっての遺跡の価値という、新たな価値を城跡に付与したことによるところが大きい。まさに、この城跡は「遂行的に」歴史遺産となったのである。

しかし、その結果として新たな問題が浮上した。文化財となることで、城跡が置かれる文脈が変わったのである。つまり、自治体のいわば公金によって遺跡が守られたことで、今後この城跡は、①住民のまちづくりの核にとどまらない、より広い文脈での意味づけが

求められることになる。さらに②公的な文化財とされることで、これまでのような住民による活用が可能か、という問題が生じるのである。つまり、歴史遺産に対する市民的価値のある種の実現（遺構の保存）によって、当該歴史遺産が他の価値体系のもとに包摂され、これまでとは異なる接し方が求められるという結果をもたらすということである。

このような経過は、センターの連携活動を様々なアクターの「連携」ととらえるだけでなく、「連携」の先に、歴史遺産に対する複数の文脈をどう共存させていくかという新しい課題が現れることを意味している。さらに、複数の文脈の共存を「公共」と置き換えるならば、研究室から公共のなかに出て行くイメージから、研究室の外での研究活動が新しい公共をつくり出すようなイメージへの転換³⁾をどのように具体化していくかが次の問題として浮かび上がってくる。

2. 専門知のありかた

上記の活動と並行して、報告者は神戸大学人文学研究科の「メタ科学技術研究プロジェクト：方法・倫理・政策の総合的研究」（代表：松田毅）に参加している。このプロジェクトのミッションは、科学技術（例えば原子力利用、遺伝子治療、農薬、再生エネルギーなど）のあり方を人文学、社会科学を組み込んだ総合的な見地から考える（＝メタに考える）ことにある⁴⁾。

プロジェクトは、「科学方法論」、「科学技術倫理」、「科学技術政治経済学」の3部門からなるが、これを〈アカデミックな研究の方法〉、〈研究、成果の利用についての倫理的検討〉、〈研究成果を運用（経済的利用を含む）、規制する規範〉と置き直せば、プロジェクトは全ての研究に共通する問題の「系」を対象にしているといえる。

このプロジェクトの背景には、高度化し閉じていく専門知、競争や経済優先の論理で導入されていく科学技術という状況に対して、科学技術の公共性をいかに構築していくかという問題意識がある。このような問題に対処する具体的な検討課題となるのが、①科学の方法論、科学の限界性について研究者と市民が議論し、共有する場をどう構築するか、②科学技術の利用についてのコンセンサスを形成する場をどう構築するか、である。

つまり、このプロジェクトと地域歴史遺産をどのように保全活用していくかという上記の問題は、専門と公共という二極をどうつなげるかという通底した問いかけを持っているといえる。「地域歴史遺産」という考え方の裾野をどうひろげて考えるかも、今後の課題である。

3. むすびにかえて —今後の実践と研究に向けて—

以上、雑駁ながら問題を整理してきたが、それではこれにどのように取り組めばよいのだろうか。一つの試みとして、専門知が構築される舞台裏、手の内を公開していくことがあげられる。イヴァン・ジャブロンカの『私にはいなかった祖父母の歴史：ある調査』⁵⁾は、歴史家が自分の祖父母の足取りを、フィールドワークや文書館で史料調査をしながら辿っ

ていく作品である。作者の調査の旅の過程で、歴史がどういう史料によって跡づけられていくかが、史料館の様子や、そこでの文書の保管のされ方、出納のされ方を通じて、具体的に語られる。

同じように、科学者はどのようにして「実験」を行い「結果」を得るのか、ジャーナリストはどのように研究の「発見」を伝えようとするのか⁶⁾、など、仕事のプロセスを公開することは、先の問題を解決する一つのアプローチになるだろう。そこには、一般的なイメージとは異なる独自の「仕事のしかた」「納得のしかた」があるはずである。

また、大学における従来の専門的な教育に、社会とコミュニケーションできるソーシャル・スキルの養成と、研究と社会の関係を「メタ」に考えるプログラムを加味してはどうだろうか。そのような教材を集めたオンライン教科書のポータルサイトを作ること、さらに専門を「メタ」に考える教材という観点から、これらを無料にすることも考えられる⁷⁾。

しかし、最大の問題は、所与の公共圏での研究活動ではなく、研究活動が新しい公共的価値を生み出す場となることである。そのためには、小さな実践の積み重ねとその共有が必要なのだろう。今後のプロジェクトの成果に期待したい。

註

- 1) これらについては、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター編『「地域歴史遺産」の可能性』(岩田書院、2013年)および奥村弘/村井良介/木村修二編『地域歴史遺産と現代社会』(神戸大学出版会、2018年)を参照。
- 2) 上記『地域歴史遺産と現代社会』所収の拙稿参照。
- 3) 土場学「公共性の社会学/社会学の公共性」(『法社会学』第68号、2008年)からヒントを得た。
- 4) このプロジェクトについてはHP (<http://www.lit.kobe-u.ac.jp/mst/>) 参照。
- 5) イヴァン・ジャブロンカ『私にはいなかった祖父母の歴史：ある調査』田所光男訳、(名古屋大学出版会、2017年)。
- 6) 例えば、ジャーナリストがどのように科学記事を書くのかについて、その内幕も記した尾関章『科学をいまどう語るか—啓蒙から批評—』(岩波書店、2013年)などが参考になる。
- 7) 大塚淳「科学哲学から見た人文系メタ科学の可能性」(『21世紀倫理創成研究』第10号、2017年)